

No.3127

山地のポスト・トライバルアート—台湾原住民セデックと技術復興の民族誌

北海道大学アイヌ・先住民研究センター特任助教

田本 はる菜

2020 年度出版助成を受け、『山地のポスト・トライバルアート—台湾原住民セデックと技術復興の民族誌』（北海道大学出版会、332 頁、2021 年 5 月）を刊行した。

本書は、現代台湾において原住民政策や文化産業振興を通じて復興の過程にある、原住民セデックの「織り」とそれに深く関わる諸技術実践を対象に、「消滅から復興へ」という一般化された説明の仕方に還元できない、セデックの人々の経験を描き出すものである。具体的には、これまで十分に光が当てられてこなかった、素材・道具・身体を介した技術的实践の内実と変容、さらに世代や経歴の異なる人々から構成される原住民コミュニティにおける文化復興の経験の複雑さに注目し、政策や市場の影響下で展開する、現代台湾の「トライバルアート」のあり方を記述・分析した。

本書の民族誌から明らかになるのは、原住民の伝統技術を産業や教育といった近代的機構に組み込んでいく様々な施策が、現地の人々の具体的な技術実践を通じて受容されたり、あるいは受容されなかったりする不確実な過程である。さらに原住民エリートが主導するようになった様々な文化復興の取り組みも、原住民コミュニティの成員が同一の目標に向かう動きとしてよりも、世代や経歴を異にする成員たちが、伝統技術に経済的効果や政治的効果、ときには呪術的効果といった、一元化できない期待や利害関心を抱きながら一時的に協働する出来事として理解できる。

本書はこのように、現代の台湾原住民の伝統技術にまつわる営みを、「消滅から復興へ」の語りにも回収するのではなく、必ずしも共約できない「無数の企図の集まり」として捉える新たな視座を提示している。また言語化しがたい技術実践の領域に注目することで、エリートに比して発言機会の限られた、一般の原住民の人々の態度や振る舞いを取り上げる点でも一定の意義を有する。こうした本書の内容は、先住民族と国家、市場との、「アート(技術/芸術)」を通じた関わりにどのような可能性と課題があるのかについて、台湾という東アジアの現場から具体的知見を提供するものであり、今日の日本における、先住民族文化と政策、市場の関係性を考える上でも有益な示唆を与えうる。